戰後教育資料
VI-402
(5)

6-6
428

九州大學第二分校白書

天野 440

九州大学第二分校学生自治會

VI-402

国立教育研究所図書

九州大学第二分校白書

(一) 序　論

1949年9月10日吾々九州大学教養部学生は、予算の皆無、学校当局の受入れ態勢の貧困をも知らず、現代日本の曙光を浴びつゝ希望にもえて入学式にのぞんだものであった。以来六ヶ月を閲し、吾々は如何に生き、如何に感じて来た事であろうか。

当九州大学第二分校の環境、設備内容の有様は道義的とは云え久留米工専の設備状況のみでは、大学教養課程を修めるべき吾々にとっては、余りにも貧弱、僅少なものであり、生活苦の増大と共に、次第に勉学への熱情も消え去らんとしてゐるのである。そもそも九大は、1949年7月に開学になった日一部、三高に教養部を置く、東大、京大に比し、二ヶ月も遅れた九月に開学となり、而も授業は九月の下旬から始められた。旧久留米工専内に理科生だけ収容せられた吾々第二分校学生は、月日の経過と共に次第に客観的諸条件が如何に悪ないものであるかを痛感するに到った。そして開学当初、大学当局の「各分校に於ける分校差はない」との言明は、単なる言葉にすぎないと認めざるを得なくなったのである。

吾々はその解決策を求めた結果、単に分校差の次に止らず、教養部のかゝる僻遠な三つの分校への分割が、根本的に誤謬である事を確認し、第二分校福岡移転、各分校廃止、教養部一本化の運動を起すことを決意するに至ったのである。去る2月10日九州大学第二分校学生大会は全学生の総意により、この要求と解決策を決議した。吾々は之等の事情と動因を明確にし、政府と福岡県当局、及び全九州大学内の皆様方に世論に訴えると共に、絶大な支援を要請せんが為に本白書を作成したるものである。

(二) 第二分校設置経過と現在及び将来への一般的観測

(A) 経　過

VI-402

九大教養部のオ二分校が久留米工専内に設置されるについての経過、即ち

オ一案　久留米工専を単科工業大学にする案

之は九大工学部と明治専門、久工専が工大となった場合を考えると、福岡県に三つの工業大学が存在する事になり、多すぎるというので次の案に移行

オ二案　久工専と明治専門とを合併して工業大学とせよ。

之は地理的遠隔の為中止

オ三案　近くの工専、師範、医大等と総合大学を構成すると云う案

之はその時、九大側より教養部を久工専と合併させてくれとの申込みがあり、諸種の困難と矛盾をはらみつつも九大案に決定。

これ以前、九大は佐賀、福高に対し、合併の折衝に当った。福高は問題なく合併に決ったが、佐賀に於ては結局ＣＩＥの一県一大学主義の下に遂に実現不可能となった。こゝに久工専との合併策が進められ、その結果１９４９年５月３０日、大学基準協会の基準に基いて、久工専には生産科学研究所と、九大二分校を設置する運びとなったが、これが予算は皆無であり全く暴挙に等しい合併がなされたのであった。

(B) 現在及将来

その結果久工専が１９５１年３月にて消滅する事は久工専教職員生徒の大きな問題となろうとしてある。現在では九大二分校、久工専生産科学研究所の二つが併置されて居り、大講分校主事は、同時に工専校長、研究所長を兼任し、一般職員は、この三つの職責を同様に担当し、事務も非常に複雑になっている。

従って明春になると、人員配置、施設の問題等、多くの難問が起って来る。者々は九大教養部分割の根本矛盾、これより生れる分校差と、更に他の側面、即ち前述の如き久工専、生産科学研究所との併置に伴う矛盾、之等を解決する道こそ、オ二分校の本学移転、教養部一本化と、当地に単科工業大学を創立する事であることを主張するのである。

(三) 九州大学教養部の構成

	所在地	校舎	分校既成の方法	文理科別	任務人員
一分校	福岡市	旧福岡商等学校	福岡市及び道部在住者	文科・理科	363
二分校	久留米市	久留米工業専門学校	其の他の者	理科	355(ゼクラ名体 理学部と)
三分校	久留米市	旧四八部隊兵舎	〃	文科	309(中15名体育学)

オ二分校は現在久留米工専学生と寄合世帯である。

(四) 各分校の現状概観

◎ オ一分校　本学部所在地であり九州オ一の文化都市である福岡市内にあるオ一分校は旧福岡商等学校の校舎、施設をそのまゝ、教養部としての授業、各部の活動等に使用でき文理科交流した良き雰囲気の中で大学教養部の課程を進んでいる。其の詳細については オ二分校との現状比較の中に具体的に示して行くつもりである。

◎ オ二分校　本校は文化的色彩の乏しい商業都市久留米の郊外にある久留米工業専門の中に設置されている。校舎は戦時中の粗末な木造建築の工業関係にのみ力を注いだもので特に生物関係や一般の教養文化的面は全く皆無と云える程極度に乏しい。教職員学生が福岡移転教養部一本化を希望しその跡に短期工業大学創設を要望するのも当然であろう。

◎ オ三分校　最後に旧四八部隊兵舎跡で"軍国主義が残した牢獄"と云うオ三分校は学校というより牢獄である。それも只三棟に過ぎぬ有様には同情と憤りを感ぜざるを得ない。幸い今回福岡移転が可能になったと聞くが、全学生の移転迄は更に一、二年を要するというこである。

(五) 第一分校と第二分校との現状比較

(A) 設備

(1) 図書

VI-402

項目	總記	哲学 宗教 教育	法律 経済	文学 語学	歴史 地理	理学 医学	工学 農学	産業 交通	其の他	合計
一分校	5754	4740	685	9479	1365	5368	359	225	916	33391
二分校	279	478	339	2230	463	3068	7317	43	285	14492

註 ① 才二分校の工学農学の項に含まれる図書は、工学一般、電気工学、土木工学、機械工学、其の他細部門にわたる専門書である。内容に自利用できるものは795冊である。

② 其の他の項には芸術技術経書を含む。

上の表から判る様に才一分校は才二分校より約2万冊多い。本校は文部省工専関係の図書に大半を占められ教養書は貧困を極めている。即ち二分校に於ては總冊数14492冊中7317冊は利用価値がない。結局使用し得るのは7175冊にしか過ぎない。

又文化の進歩と共に更新さるべき本も沢山ある。又書庫がないのでこゝに掲げた図書の相等数は研究室に分散してあるので実質的には更に僅少なものしか学生に閲覧せられていない。

才一分校は福岡市内にある関係上九大本部の16万冊を擁する充実した図書館を利用できニヤに至つて全く比較にならない。学生にとつて図書の貧困は最大の痛手である。

(2) 校舎及び各校友会サークルの設備

本校はお粗末な木造建築で机、腰掛が不足して政治、経済、法律、社会は140名収容の部屋が最大であるがそれでも多くの学生がズシ詰めで立つてノートを取ることは勿論できない。窓ガラスが不足し階下廊下の窓は板張りである。だが才一分校の場合は旧橋詰であつた為、一応之等の諸設備は整ひ各サークルはBoxを持ち昼休等部員が集つて談合したり又研究会をやつたりしてゐる。才二分校の突然ヒレた理科生だけのそして殆んど理工科的施設の外の環境。と不充分な各部活動等に比べて才一分校は教養課程に最適の環境であろう。

(3) 体育施設

一本校のグラウンドは凹凸が多く雑草が繁茂している。体育館は窓ガラス

なく床が悪い。テニスコートも不備であり各体育部のBoxは勿論ない。一分校はグラウンドこそ最善ヒ迄ではなくとも大体支障を来たさない。其の他スタンド、バックネット等がない。各部のBoxは勿論ある。

(4) 教授の研究室

研究室は本学内に与えられている教授が多く久留米迄出張するのには往復に莫大な時間と費やし出張費は殆んど旅費位である。他然的に休講の時間数も多いのである。これにひきかえ才一分校は教授は市内より通学で出張もなく時間的損失も休講時間数もないのである。

(5) 理科設備

イ) 化学設備：凡ゆる点に於いて見劣りのする才二分校で唯一の取柄として挙げられるのは之ばかりである。本校が工業専門学校を使用している為この方面の施設、器具には比較的恵まれている。詳細は資料の比較が困難な為に之を掲げず、ハッキリ優れていると結論するに止めよう。只実験用ガスが来ていないのは全く遺憾である。然し本設備は教養部、生産科学研究所、工学の間の備品で凡てが教養部の所属ではない。

ロ) 生物学設備：学部入学に当り最も困難な入試を控えている生物系学生は才一分校と次の様な歴然な差があることを見逃してはならない。

	顕微鏡	使用する学生数	一台当り人員	実験用具	標本 植物	標本 動物
一分校	58台	90	1.5	47種141	32	117
二分校	20台	162	8	0	0	0

所才二分校には開学当初生物学設備は零であり、我々が入学して相当日数を経て漸やく実験室への改造が初まり才一分校より非常に優れて実験に取り掛った。更に才一分校の附属設備を見ると、左表の通りである。

	蒸溜	交流	水道	ガス
準備室			○	○
実験室	○	○	○	○
講義室				
管理室	○	○	○	○
教授室	○	○	○	○
教員室				
標本室				
準備室				

○印は上段の項目の設備がある事を示す

本校は机、椅子、水道しかない実験室が一つしかなくその他にはなにし更に顕微鏡が会計課に保管されている為、学生はそこから大分はなれた教室迄運ばねばならずその為会計課の事務が終る時迄しか実験できない。この生物学設備

VI-402

をオ一分校程度に整えるには相当の歳月を要すると云われている。

ハ) 物理学設備：

	オ一分校		オ二分校	
	種類	個数	種類	個数
電気関係器具	97	137	32	176
光学 〃	56	72	43	93
力学 〃	39	41	10	31
熱学 〃	22	25	3	5
波動 〃	21	26	10	16
其の他	79	80	42	60
合計	314	383	140	381

工業専門学校として理工関係の諸設備はオ二分校がその機械等に於て多いとしても物理実験器具の種類に於てオ一分校の半分にも満たない。

(6) 寮

	現在寮生	其の他の同居者	合計	一室に付き	一室の畳数	部屋数	定員 一室	定員 合計	24年度同様の新入生入寮とすると 一室	24年度同様の新入生入寮とすると 合計
オ一分校	69人 文28 理41	但補高生 約15	約85	1.4人	14畳	60	6人	360	約25人	約150人
オ二分校	185人 文2 理183	久工専生 2年と4年生 約60	約250	3.2人	10畳	78	4人	312	約6人	約450人～500人

以上大寮寮の部屋と寮生の数に就いて表わしたがその他文化的面生活費等の面に就いては後で述べる。オ一分校では炊夫4名で1名は毎日休む様になって居り実質的には3名で而も1名は公務員であるがオ二分校は炊夫、寮母、掃除夫、ボイラーマン計八名と皆非公務員の為直接寮生の負担によって給料を支払っている。凡百は一分校には無いが本校には有る。

(B) 学業状態

イ) 授業関係

	クラス編成	時間割編成	24年 休講数 9月	10月	11月	12月	1月	25年 計
一分校	文科4組 理科5組	文理科共同一時間割で自由に選択することができる。	19回	32	18	15	2	86
二分校	理科9組	各クラスで違う所くは時間違っており選択に不充分な点あり	17回	47	39	36	10	149

こゝに一分校と二分校との分校差が明瞭に表われている。一分校では文理科生の交流は授業時間割編成の中でも活かされている。然しオ二分校では各組の時間割の殆んど違いの為一週間に全組共通のブランクは僅かに土曜日の7.8時間である。校友会活動を阻止しているのは之である。前の表の中、11月の休講数に就いて云うと本学部と分校との兼任教授による休講は二の月16時間を数えオ二分校専任教授でさえも22時間の休講があり オ一分校に比較すれば21時間の差となる。一年間には一体如何程の差が出来るだろうか？ 殊特に要望している学部教授や一、三分校に於ける文科方面を担当する教授の休講は者々にとって大きな痛手であり少くしては初め契約された分校差はないとは云う迄もは嘘であと信じざるを得ない。之は云う迄もなく久留米が本学所在地の久留米より遠ざかっており、交通の便悪く、それに要する時間の大きさと共に教授には旅費も不充分であり手当は全くない為である。

ロ) 授業以外の学習に就いて

者々は次にオ一分校が地の利を得ている為に文化的環境に恵まれ学習と研究の機会が如何に豊富であるかに就いて述べよう。

① 文化講座……学部教授と適宜に希望する時に招き文化講座の講義を聞く事が比較的容易である。

② 各部研究会……この研究会では教授も一緒になって参加している。

③ 学外団体での文化講座

日	技術論	建設局応援団より
木	金融経済論	福銀内金銀連書記局より
金	民主々義革命	日教より
土	国家論	電産県支部より
	美術論	民主々義科学者協会福岡支部より

④ 九大学部が近い為学部での哲学社会、倫理の研究会へ出席できる。

以上の如くオ一分校は教養を身につけるに多くの利点を持つがオ二、オ三分校のこの方の貧弱さは蔽匿する迄もない。

(C) 生活の状態

イ) 通学状況

VI-402

	現在在籍	休退学死亡	寮生	自宅	親戚知人	下宿	間借自炊	その他
才一分校	363	1名の外不明	69	208	19	41	不明	25名欠席の為調査
才二分校	352	7	185	57	14	93	3	長欠者多し

但し寮生は福岡生、久工専生を除く。

上表によっても明らかな如く通学状況に於て分校差がはっきり出てきている。しかもそれは、そのまゝ生活、学業へと大なる影響を及ぼすものである。

（説明） 才二分校には九州以外の学生が多数であり、又自宅、親戚、知人宅からの通学生の殆どは通学に大なる時間を要する遠隔の地に下宿なり間借をしているのである。

2) 育英資金、授業料減免について

	在籍数	授業料減免者全額換算	育英資金継続者	24年度同上新規申込者	同左採用者	その比	自宅通学
才一分校	363	14	60	88	40	45.6%	208
才二分校	352	16.5	100	157	32	20.2%	57

即自宅通学が才一分校では50%以上で本校では18%である故に、才一分校学生には全学生の30%もが育英資金を貰う事は本校の37%に比し明らかに不合理である。万一学校側が24年度奨学生採用を入試の成績によったとはほうとも、成績が僅か一、二回の試験で決るものではない事、更にアルバイト学生、貧困学生にとっては成績も当然思わしくない事等によってその不当な事を厳重に抗議するものである。

又既に今年になり2名の全然経済的理由に基く退学者が出て来た事も注目される。かく悪慣は吾々を極度に窮乏におとしいれ、必然的に学問研究への情熱を喪失させようとしている。かゝる時に吾々がアルバイト出来る所を求めて運動するのはアナクロニズムであろうか？

尚授業料減免について特に注目される点は文部省正式指令「総学37号」によって授業料減免者数を全学生数の10%迄認める事になっているにもかゝわらず全然九大当局によって行われず加えて大蔵省よりの「全体の5%にせよ」と云う口頭指令が忠実に守られている事実である。更に又、九大補導

課長の一存により「学部で5.6%免除を認めたから、各分校も5.6%迄免除を許可する」事になってそりながら、それさえ全然実行されず未だに僅か4.7%に止っている事も吾々の注意を喚起する。吾々は上記の二点に関し、深い疑惑と憤満を感ずるものである。

3) アルバイト問題

国民生活の完全な破綻から、多くの数の学生がアルバイトによりその学資否全生活費を得らなければならない現状である。

① アルバイトの大きな部分を占める街頭販売は仕入原価の高騰と購買力低下によって崩壊しきっている。

② セールスマン、外交員の口も中小企業の金づまりと倒産によって久留米では皆無に近い。

③ 家庭教師も対象となる小市民層の没落によって極めて少い。

④ 肉体労働も土建業者、一般会社、工場の窮乏化によって口が非常に少く、職業安定所も欠業者しか取扱ってゐないため学生のアルバイトの口は殆んどない。

以下これらの実態について述べよう。

イ 福岡に於るアルバイト：－旧九大の資料によると

新聞読者募集、宝くじ売り、物品販売及び注文取り、荷札書き、筆耕、プリント切り、校警、本整理、衣類数量調査、荷造運搬、地ならし、通訳業事務、選挙事務、郵便、家庭教師、タイピスト、世論調査等で、久留米に比し種類、人員共に比較にならぬ程多い。

ロ 才二分校に於て：－

昨年末の冬季休暇のとき学生は久留米及び帰省先でアルバイトをする事が出来た。然るに今年に入るやアルバイトの口は皆無に近い状態で僅かに靴磨と商店の宣伝に極く少数が従事し僅たにすぎない。にも拘らずアルバイトを望む学生は全学生の大部分となっている。この事即看過者と商業都市に於けるアルバイトの口の問題は極めて重視されるべきである。つまり、アルバイトに於ても（その種類、人員）福岡の方が遠かに久留米より有利である。

(D) 環境

1) 文化

大阪商人も舌まく久留米商人――その久留米、商業都市久留米は文化的色彩なく、只管向上を念ラ吾々学生には決して恵まれた町ではない。他方福岡は西日本最大の文化都市である。

同じ大学の学生であり乍ら、オ一分校に比べて結果的に文化的レベルの甚しい低下を来す事は勿論の事で、そのハンディキャップと云ラカ不合理、不平等、非人間的な取扱方には吾々は断じて承服する事は出来ない。

(イ) 映画:― 久留米は福岡より2月位おくれるのが普通。

(ロ) 絵画:― 福岡では最近のものとして日展、佛蘭西画復写展、二科展、久留米ではせいぜいよくて新制高校の美術展。

(ハ) 音楽:― 福岡では県庁歌劇団の"椿姫"を筆頭にオペラ研究会発表の"セビリヤの理髪師"それから梶原完、井口基成、モギレフスキーの演奏会、全国学生音楽コンクール、全国音楽コンクール予選、夏の音楽会、婦人音楽団演奏会、市内各団体の発表会等、種々の催しは絶えない。

一方久留米では、梶原完、砂原美智子の独唱会位がやっとである。

2) 交通

オ二分校は300米の福をへだてた久留米市の端にある。市内は電車はなく専ら自転車がそれに代っている外、一区5円と云ラ高い料金の上に回数少く利用度は少い。従って通学生は登校に困難を感じ寮生は、その生活に不便を感じている。此点一分校は好條件にめぐまれ、電車停留所迄5分も歩けばよく市の中央部へも寮局に行かれる。

以上は久留米、福岡各一都市についてであったが、両市間の連絡をみると、電車、汽車共に往復100円を要し、時間は電車にては40分～1時間汽車ならば1時間半かっり事務当局や学生自治会も共にその不便さを痛感しつゝある。殊に自治会は乏しき会費の内より連絡費として月、月相当額の金を出すことは大なる負担であり、自治会各部の遠征等も自然に抑制されがちである。

事務当局の不便については(五)(F)に述べる。

(E) 新入生収容能力について

オ一分校	最大収容能力 950	適当な人員 800	新入生が入って来る25年度では 730	現在 363
オ二分校	〃 900	〃 650	〃 700	〃 355

即ちオ一分校では、福岡及びその周辺の学生を収容する為、学校には余りが出来る位であり、オ二分校では遠くは大阪等高知の学生迄収容する為正にスシ詰めの感があり、合併授業も25年度から増加される見込である。つまり本州の人間が福岡を通りこして、久留米まで下って来る如き学生の配分方式がかゝる不合理な現象を起すのである。しかもかゝる障害は根本的に教養部一本化によってのみ、除き得るのである。

(F) 分校事務の煩しさについて

(D)、(2)の項で述べた様に福岡との連絡は不便を極め、甚しきは文書による連絡では会議の報せが、その日になって、二分校の事務局の手に入る事も少くない。又会議が本学(福岡)にあてる為、学生委員その他の役員(全て教授)の出張が度々で、休講の数の多い一つの原因である。更に書類は正式のものは、全部本部に保管され、写しが分校に廻される現状で分校事務に大なる障害となっている

(六) 第一分校と第二分校の現状差比較よりの結論

(A) 分校差はあらゆる点に於て明白であり、殊に図書、各部のBox、生物学方面設備、寮、学業状態、文化遺産、アルバイトにては顕著である。而も学問するのに仕要かく可からざる環境は(D)環境の項で詳述した如く、前には何くれども、学問には、そして真面目なアルバイトには等しくそれ、役の一つもない久留米であり、吾々はその害毒の知らず知らずに体中に浸透しつゝあるように戦慄するものである。

(B) 解決の方途

(1) 方針

以上述べた如く、吾々が愛するオ二分校とオ一分校の余りにも明白な分校差を無くすべし。吾々は、

VI-402

㋑ 福岡に新校舎を新築し、全九大教養部学生を一つにする事。

㋺ その為に、政府は一切の軍事基地化、軍需産業復活への予算をなくして吾々の平和的要求、実現の為の予算を組まれん事。

㋩ 学校当局は、その為の予算を至急組み、本省に提出されん事。

以上を要求する。

(2) 次にその具体的方針としては、上に一寸述べた様に才三分校の移転用として才一分校内に新校舎が新設される際に、才二分校も移転出来る様、その校舎の拡張の実現を図る。

更に者としては、本学の教室の使用も才二義的に考えて居る。即ち

㋑ 昨年迄附属工専500名の学生を工学部教室内で講義していた事。

㋺ 現在、工学部・図書館、法文学部の各々一部に於て、半年間の予定で200名程度の教育長の講習が行われているが、この様に空けようと思えば直ぐ空けられる室が大分あるらしい事。

㋩ 法文本館のみで18教室ある中、同時に使用するものは、最大8教室にすぎない事、従って残り10教室中、数教室を時間の合間に貸して貰えれば授業可能な事。

(3) その理由

㋑ (2)㋑㋺に述べた如く、その実現の公算が最も大である事。

㋺ 生活問題：下宿料は3000円～4000円で大差なく、間借りも畳一枚100円を上下する程度で変らない。物価は、野菜は変らない。然肉類は博多が幾らか安い。衣服、日用品、その他食糧以外のものは、博多の方が相当安い。アルバイトの点に於ては比較にならぬ程博多の方が有利である。こう見て来ると都会は生活費が高いという常識に反して、かえって博多の方が生活費は仕易いということになるのである。

㋩ 分校側

(i) 教室；新築されるのであるから問題は氷解する。

(ii) 図書；二分校図書館より遥かに教養図書が多い。一分校図書館が使え、更には日本の国立大学で Best ten に入る九大図書館が常に使用できる。

(iii) 医療及び厚生設備；当然医務室も出来得るし、何よりも医学部附属

医院の利用が学友会に加入する事によって、補助を受けながらなし得る

(iv) 体育施設；之も同様に解決、その上学友会の運動部として十分の活動が成し得る。

(v) 教授の研究室；もともと教授の研究室は本学内に与えられているのであるから、通う事による時間の浪費や随時に適切な研究が成し得ないという悩みも解決される。

(vi) 学業；博多から通って居られる教授方が、通わずに済み本学内の用事にもわざわざ時間をつぶさずに済む様になれば、休講も減り、講義内容も学部の教授に御願いする事によって著しく充実される。

(vii) 環境；文化環境には、九州の首都を以って任ずる福岡市を思えば又何をか云わんやである。

(七) 結　び

成る程我々は勉学の熱に燃えている。眞理を求めて遠くは四国、大阪から試験受けてやって来た学生もある。併し今の如き現状で、どうして勉学が出来ようか。満足に良書なく、而も生活は苦しいのだ。吾々は努力する事を知っている。そして、それのみが世論を動かし得る事をも知っている。

やろう！　少くとも同じ九大の他の学生が置かれている環境に吾々も生活する権利がある。

止むに止まれぬ気持で、吾々はこの白書作成に当った。吾々は、関係方面、政府及び九大本部当局が努力して下さる事を信じ、且又一般諸賢の御理解と御協力とを御願いして筆をおく

九州大学第二分校学生自治會

VI-402

宣言

今日の教育の現状は国内国外情勢の緊迫と共に嘗てない惨状を呈し、ある、即ち政府の軍事的植民地的予算による国民生活の破綻から学生の経済的地盤は失はれ、又国家予算に取つては微々たる収入に過ぎず、只吾々の生活を一層苦しめる意味しか持たぬ授業料の値上げ等により、吾々の生活は極度に急迫せる事は云ふ迄もなく、それに伴ひ、学生の一部にはデカダンスを生み、又文教予算の貧困により、学校施設は荒廃し、教職員は又低賃金に伸吟し、吾々の学問の進歩発達にとり、実に重大な危機となつてゐる時、反ソ反共に名をかる進歩的教職員の追放や、吾々が自らの学生生活と学園の自由を守らんとする真剣な運動に弾圧し、単独講和、なしくずし講和を強引に押進め、吾が国を植民地化し、又軍事基地とし、更に、吾が国民を奴隷化し、再び吾々をかの悲惨なる戦争に追ひこまんとする事は、明かに憲法をないがしろにし、世界の平和的民主的世論を無視し、ポツダム宣言をふみにじつた帝国主義陰謀の環としての、ファッショ的政策である。吾々は之に対して、断固反対し、次のスローガンの下に運動を進める。

一、ポツダム宣言に基づく公正なる全面講和即時実現。

二、講和條約締結後の占領軍の即時撤退。

三、一切の戦争準備、植民地化を即時停止し一切の帝国主義的軍事潜勢力の一掃。

四、諸民族間の同権と友好に賛成する全世界の平和勢力に対する提携と無制限の支持。

五、民主的な教育を守り自由なる民族的芸術文化の確保と発展。学生生活の確保と向上。

吾々は右のスローガン貫徹の為、次の要求をする。

1. なしくずし講和の即時中止。帝国主義執拗力の日本よりの一掃し日本民族の自由と文化を守れ。
2. 巨額にのぼる戦争準備、植民地化予算に反対し、吾が産業、金融、輸送、貿易が外国の資本に隷属することに反対する。
3. 不当なる重税を廃止し、中小企業を始め、労働者、農民の生活を保護し学生にアルバイト課税の撤廃。
4. 新制大学を始め各地の貧弱な学校の設備改善、研究費の増額、教職員の生活保障。
5. 授業料を年額一八〇〇円、寄宿料三〇〇円とし、旧制大学と同額にする事、学割の無制限発行。
6. 奨学生採用を、学業成績のみで一方的に決定せず、月額四〇〇円とし、希望者全員の採用。
7. 教育学部或は教育課程を修業する学生に対する授業料を徴収しない事。
8. 全国の諸学校に於ける植民地的要素を一掃し、反動教課書及び職能偏重教育の廃止。
9. 一切の教育面に於ける軍事的再編成、イデオロギー的動員学園の報国団化の中止。
10. 民主的進歩的教職員、学生を追放し、学園を帝国主義の支配下におかうとする事に絶対反対。
11. イールズ氏の声明撤回又イールズ氏講演による授業休止反対。又その講演の為学校予算を支出せず、そんな予算があれば貧困学生に與えよ。
12. 学園より政治的自由を奪はんとする文部次官通牒やその他あらゆる不当弾圧その反対及び学内文化研究各サークル及び政党支部等の結成と活動の自由。掲示制限の撤廃。
13. 無中る宣伝特集出版特集による戦争挑発デマ宣伝及びエログロ文化排撃。
14. 世界各国との学生教職員の渡航留学の自由及各国との新聞書籍映画等の自由なる交流。
15. 在日外国人の自主的教育の完全なる保障。

尚、最後に吾々は全日本の人民が統一戦線に結集し、平和を守る会にあらゆる団体及個人が参加し、平和と独立の為に斗ふ様に要請する。そして吾々は以上の要求達成の為にあらゆる盡しを、徹底的に斗ふ決心である。

一九五〇年三月二十七日

九州大学第二分校

附記　九大第二、三分校を福岡に多発せる教養部を一つにする為に政府は直ちに福岡に新校舎を建設せよ。留米における二、三分校の教職員、学生の要請に応へ九大二分校、文工専の為とには最期工大を創設せよ

VI-402

VI-402